

3. 紹介「海外に学ぶ」:工業都市から欧州文化都市へ再生 Glasgow(スコットランド)

(Japa 理事 小畑きいち:青山学院大学元客員教授)

繁栄から衰退へ

グラスゴーは、英国で第4位の都市、スコットランドの首府エディンバラを抜きスコットランド地方第一の都市である。人口は約63万人超(最盛期1950-1960代には人口100万人超)である。1960年以前では、海軍造船所があったことから欧州最大の造船建造量を誇り、英国有数の工業都市として発展した。有名な客船タイタニック号やクイーン・エリザベスII号もこの地で建造された。19世紀末にグラスゴーは英国有数の工業都市として隆盛を誇った。

また、15世紀創立のグラスゴー大学を擁するグラスゴーは文化・学術の街でもあった。(グラスゴー大学は1451年創立、「国富論」を著した経済学者のアダム・スミスや蒸気機関の改良発明で有名なジェームズ・ワットなどを輩出し、日本にも馴染があり、アドレナリンを抽出した高峰譲吉や日本のウイスキーの父・ニッカの竹鶴政孝もこの大学で勉学)。また市内には最盛期の壮麗な様式の建築物などが多く点在し、往時の景観も偲ぶこともできる。

しかし、第2次大戦後に主力の造船業などが衰退し産業空洞化が進み、失業者が市内にあふれ、犯罪が増加してグラスゴーはすさんだ「労働者の街」と見られようになった。人口も20%超減少し、グラスゴーは衰退都市としてのイメージを持たれるようになり、衰退グラスゴーの市政は混迷が続き、いくどとなく市のイメージ回復と都市再生を模索したが衰退から抜け出すことが難しく市政は迷走を極めた。



グラスゴー大聖堂



グラスゴー大学



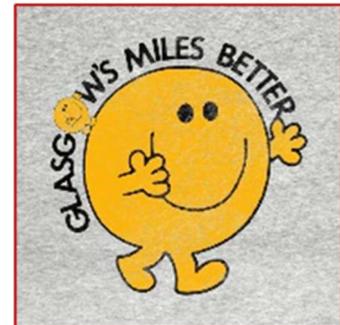
チャールズ・マッキントッシュ像

Glasgow's miles better Campaign

ネガティブなイメージの払しょくと都市再生を目指し1980年代にMichael Kellyが登場し、グラスゴー再生のために市長として卓越したリーダーシップを発揮することになる、グラスゴー再生のためには「文化ツーリズム」が必要と考え、そのために横断的な組織改革・構築、さらに市民の理解・支持を得ることが第一と考案し、市民の地元愛と自信を持たせるために衰退工業都市から文化創造都市へとイメージ転換を大きく掲げた。

その一手法として、イメージ転換戦略を発想し、スコットランドのマーケティング会社と組み、スタートした事業が「**Glasgow's miles better**」キャンペーンである。この戦略に対して、議会のイデオロギー左派は、労働者の生活福祉に直接に利するものでないと、このキャンペーン戦略に批判した。しかし、当時、英国経済の立て直しを進める首相「Margaret Thatcher」の賛意もあり、実施を強行することとした。

このディステネーション・キャンペーンを進めるために、キャンペーン・キャラクター「Mr. Happy」を中心ロゴに据え、フィギュア、Tシャツ、マグカップ、コースター、シール、ロゴ使用登録などによる販促収益をベースにした運営資金などによって広くPR拡大を推進した。“シンボル・キャラクター”である「Mr. Happy」は多くの年代層を超えて人気を博し、人々に認知されるに至り、「Glasgow's miles better」キャンペーンは徐々に好評を得ることとなった。



Glasgow miles better ロゴ

そして、地域文化再生を中身のあるものとするために既存の文化施設(美術館や博物館など)を改修、都市景観の修景なども進め、市民ボランティアによるガイドツアー、そして既存文化資源の発掘などを推進し、広範な宣伝広報により英国内外から訪問客の掘り起こしにつなげた。

“No Mean City”と揶揄された都市が大きく変化する契機となった“**Glasgow's miles better**”キャンペーンはその後の歴代労働党市長に施策が引き継がれ推進され、文化イベントの考案、集客施設の新設などを含めた再開発、文化創造施策、市民の誇りを復し、さらにイベントセンターなどを開設し、欧州全域を対象とした国際会議、国際大会などの招致に精力的に取り組んだ。



グラスゴー・サイエンスセンター

1985 年にはコンサートがクライド川沿いの造船所跡地を再開発したイベントセンターで開催され好評を博した。その後も跡地の再開発が続けられ、英国最大の総合展示会場及び大型会議施設として“スコットランド エキシビション & コンファレンスセンター (SECC)”が建設され、集会施設は著名建築家ノーマン・フォスター(1999 年プリツカー賞受賞)による斬新なデザイン建築物として注目を浴びた。続いてコンサートスタジアムなども建設され、グラスゴーでのイベント主開催スポットとして川沿いの工場跡地が脚光を浴びるようになった。

1988 年には、“International Garden Festival”の開催にも成功した。そして文化資産として繁栄期における産業資本家らによるアート・コレクションや当時の華麗な建築物群、さらにスコットランドのアール・ヌーヴォーを先導した“グラスゴー派”のデザイナー・建築家である Charles Rennie Mackintosh らゆかりの建築物や調度品など文化資源の掘り起こしを行い、一般観光のみならずデザイナー・建築家など専門家などの来訪も増加し、多彩な来訪者の増加に奏功し、文化観光地化され、文化創造都市へとステップを進めた。

<次号に続く>